

No. 393【2020年2月7配信】

最初の市会議員選挙—選挙と新聞報道— (担当: 工藤)

こんにちは! 室長の工藤です。

明治31年(1898)4月1日、青森町はほぼ10年越しの悲願を達成し市制を実現しました。そして次は市会議員選挙を経て議長、市長、さらには市の執行機関である市参事会のメンバーなどを決めていくことになります。

最初の市会議員選挙は、6月4日から6日にかけて実施されました。投票日が3日間設けられているのは、当時の選挙が「等級選挙」であったことによります。市の場合1級から3級までの区分があり、青森市会は定数が30人でこれを各級等しく10人ずつ振り分けます。一方、有権者には納税額・年齢・居住要件等の条件があり、納税額に応じて各級に振り分けられます。

その結果、1級の有権者数は38人、2級は178人、3級は964人となりました。1級は高額納税者層、2級、3級となるにしたがい有権者一人当たりの納税額は小さくなります。そして、1級は38人、3級は964人で10人の議員を選ぶことになるので、高額納税者層に有利な選挙制度といえます。ちなみに、立候補者はどの等級から立候補しても構いません。そして、選挙は6月3日の3級の投票から始まりました。

さて、選挙戦は大きく「実業派」と「有志派」という二つのグループによって争われました。実業派は大坂金助をリーダーとする青森町政を担っていたグループで、一方の有志派は平和と市民の幸福をうたって集まったグループです。両派は「新聞」というメディア、すなわち実業派は『陸奥日報』、有志派は『東奥日報』を通じて主張を展開しました。

『陸奥日報』は寺井純司が明治25年創刊した新聞で、平成16年(2004)時点で2号分の紙面が確認されていますが、この市会議員選挙当時のものではありません。ですから、実業派の主張は分かりません。一方、『東奥日報』は4月後半から連日関連記事を報じ、なかでも「市会議員選挙談」(4月28日～5月14日)、「破邪録」「破邪正顕録」(5月20日～6月4日)という二つの連載では実業派、『陸奥日報』を痛烈に批判し、選挙戦終盤では有権者の大勢が有志派に傾いていると論じていました。

3日間の投票による結果は実業派の圧勝でした。しかし、これでノーサイドとはなりません。有志派は選挙の不正を指摘して、その無効を求める訴願書を6月6日付で青森市事務取扱工藤卓爾に宛てて提出したのです。『東奥日報』に掲載の訴願書によれば、選挙当日に市内にいなかった人物の投票、すでに亡くなっている人の投票、投票場に入場した人数と投票数とが一致しないなどの選挙違反があったということです。

このように、最初の市会議員選挙はメディアを巻き込んで熱い選挙戦が展開したのです。なお、有志派が提出した訴願書の行方については、機会を改めて紹介いたします。



寺井純司
(『新選代議士列伝』
〈金港堂 1902年〉、
国立国会図書館デジタル
コレクション)